

# Hukutana

## ふくたな

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース  
The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi  
January 1999 No. 8

### サンプルの魅力

中村 香子

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

ケニアのサンプルという土地と人の美しさに魅せられて、ナイロビでNGOの仕事をしてながら、暇を見つけてはサンプルを訪れていた時期がありました。NGOでは約2年間、ケニアとタンザニアの国境近くに診療所を建てるといって、とてもやり甲斐のある、真に楽しいと思える仕事に夢中になっていました。惚れたケニアという国のために、自分が何か貢献できているような、そんな気持ちのいい錯覚に酔いしれていたのです。

サンプルを何度も訪れるうちに、友人もどんどん増えていきました。町を歩いていると彼らに呼び止められるようになり、「砂糖を買って」「子供が病気で」「お腹すいた」…などという絶え間ない攻撃に、一分とまっすぐ歩けなくなっていました。どういう知り合いだったかもわからない人達にたかられて、自分の財布にいくらはいっているのかこっそり確認する場所さえなく、とても疲れてしまったことがありました。

「私、もう疲れちゃった。どうしてみんな私の顔を見ると、お金、お金、お金って…。私だって必死で仕事してお金を稼いでいるのに、彼らは働きもしないで人にたかることしか考えない…。」

力無く言う私に、しばらく黙って考え込んでから、あるサンプルの戦士が言った言葉が忘れられません。

「キョーコ、僕たちはミルクに慣れすぎている。ミルクというのは今日なくなるまでしぼっても、明日になればまた出る。僕たちにとってお金はミルクみたいなものなのさ。みんなきみのところに来て、今は出るかどうか、試しにしぼってみているだけだよ。牛だって出ない時は出さないんだし、きみも出る時だけ出せばいい。」

ほほー。そうか、お金はミルクだったのか。どんなに沢山あっても明日まで持ち越す必要もない。だから、ひとりのものにはなり得ず、持たない人へと自然にながれてゆく。ふーん。それで、

*Milima haikutani, lakini binodamu hukutana.*

山と山は出会わないが、人は出会うものだ。(スワヒリ語のことわざ)

*Mountains never meet, but human beings do. — A Swahili proverb*

なにに、私は彼らが愛して止まない牛なわけ？

そんな嬉しい発見とともに、私の目からうろこが一枚ずつはがれていきました。その時から、自分の中にあつたような気がしていた開発という仕事の意味が、だんだん霧の中に隠れていってしまったのです。そしてNGOの仕事も辞めてしまいました。

またある時、放牧から帰って来る牛を、丘の石の上に座って愛しそうに目を細めて見守りながら、別の戦士が言いました。

「キョーコ、あの牛たちをみてごらん、あれは僕たちの銀行なんだよ。パークレー、ケニア・コマーシャル、スタンダード…と並んで帰って来る。これを本当のお金に換えて銀行に預けることもできるけど、僕たちには、こんな美しいものを見えないところにおいておくなんていう無駄は考えられないんだ。」

それを聞いてまたまた嬉しくなった私は、子牛を一頭買って、自分がナイロビに口座をもっている銀行の名前から、「アムロちゃん」と名づけ、悦に入っておりました。ケニアを去る時、最も信頼していた人にアムロちゃんを託し、その成長を日本でも楽しみにしていました。

一年後、再びサンプルを訪れた時、開口一番、「私のアムロはどこ？」と聞いたところ、彼らは答えました。「キョーコ、アムロは死んだ。だからみんなで食べた。でも死んだ牛のことについていつまでも言わないでくれ、気分が悪くなるから。」

してやられたな、ほんとは売ったんでしょ？ というくやしさと、そんなあっさりした彼らのことがますます気に入った、という本心をひたすら隠し、「だったら皮はどこなの？ 皮はあたしのもんでしょ、皮をよこしなさい！ 皮は一体どこ？」と、ヒステリー女を演じる私でありました。

こうして何本も取られる快感が忘れられず、今度は学生としてサンプルに行けることを、とても嬉しく思っています。

### What I Learnt from Samburu People

NAKAMURA Kyoko  
Kyôto University

When I once worked with an NGO in Kenya, I would often visit Samburu, for the land and its people attracted me much. The more often I visited, the more friends I got there. They sometimes asked me to give some money for their lives. One day, when I was very tired of responding to their requests and complained of it, a Samburu soldier said, "Money is just like milk. Even if we finish off milking a cow today, we can milk it again tomorrow. They just try to ask you money as they try to milk a cow. You can give them money when you can, as cows do." This explanation impressed me, and I learnt why in Samburu a single person is not in possession of money but has to distribute it to the poor people. Now, as a junior anthropologist, I am looking forward meeting them again.

## センター・ニュース

## できごと

## 12月

- 11日 椎野若菜氏（東京都立大学大学院、社会人類学）来訪。
- 14日 重田眞義氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、農業人類学）来訪。
- 17日 水野一晴氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、植生地理学）来訪。
- 18日 Bethwell Onyango Owuor 氏（ナイロビ大学植物学科、民族植物学）来訪。  
松園万亀雄氏（東京都立大学人文学部、社会人類学）来訪。
- 19日 第134回学振セミナーおよび懇親会開催。
- 21日 佐藤俊氏（筑波大学歴史・人類学系、生態人類学）・孫曉剛氏（筑波大学大学院環境科学研究科修士課程）来訪。
- 22日 James N. Waiyaki 氏（メソジスト大学理工学科、農業昆虫学）来訪。

## 1月

- 8日 Dennis Mairura London 氏（ナイロビ大学アフリカ研究所、人類学）来訪。
- 12日 内藤雅雄氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東アフリカのインド人社会）来訪。
- 19日 高岡貞夫氏（東京都立大学理学部、自然地理学）来訪。  
Nassima Atmaoui 氏（ナイロビ大学地質学科、構造地質学）来訪。
- 24日 金子守恵氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）来訪。
- 25日 Karue R. Gicheru 氏（カラム・アカデミー、数学教育）、H. M. Gatithi 氏（経済学）来訪。  
安東建氏（朝日新聞ナイロビ支局）、浅野哲司氏（同東京本社写真部）来訪。
- 31日 J. Teyie 氏（ナイロビ大学文学部、上演芸術）、Sam-Barthelemy 氏（フランス語）来訪。

## はじめまして

## 椎野若菜（東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程）

15か月ぶりのナイロビ。着いた翌々日は独立記念日、そしてマタツのストライキなど、イベントがつぎきました。郵便局はクリスマスカードを送ろうとする人々でごったかえし、長距離バスのチケット売場も道路まではみ出る長蛇の列です。クリスマス休暇の準備にむけて、ナイロビの人々の気ぜわしさを感じます。今回は約2か月弱の滞在予定ですが、西ケニアのヴィクトリア湖畔に赴き、漁民の村で調査をする予定です。今晚、帰省客とともに西へ向かいます。1999年がよき始まりでありますように――。

## 金子守恵（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

はじめてのアフリカ調査を終えナイロビに立ち寄りました。98年の11月24日から約1か月半、エチオピアで壺作り職人の女性に習って壺を作ってきました（マーケットで自分の壺を売っても来ました）。滞在中、何度か「もうだめ」とくじけたこともありましたが（笑）、フィールドをあとにしたばかりなのに、もうはや次にくることを考えております。私もどうやらかの有名な「アフリカの毒 (!?)」に侵されてしまったのかもしれない。

## 契約農業の可能性はどこに？

大倉三和

(立命館大学大学院国際関係研究科)

「先進産業社会の人間による第三世界研究とは、まず自らの社会の発展のあり方と、第三世界との関係についての自覚のうえになされねばならず、先進産業社会の人々の態度の変化を促すものであるべきであろう。」小倉充夫氏のこの言葉を研究の出発点また最終的な課題としつつ、いまは、契約栽培制度にもとづく農村開発の可能性と限界についての実証的研究に取り組んでいる。

契約農業(contract farming)では、農産物の加工・販売に携わる業者と農業生産者との間に、口頭・書面など何らかの形の合意に基づく契約関係が結ばれている。この契約関係において、一方の農業生産者は、契約諸規定に基づく特定農畜産物の生産、そして契約企業への出荷の義務をおう。他方の業者は、その特定農畜産物を契約に定められた量ないし価格で購入し、加工・販売する義務をおう。この固有の農産物流通において、業者の義務は生産者に当該作物の市場へのアクセスを保障し、生産者の義務は業者に原料作物の安定的供給源を保障することになる。

このように、いわば農外諸部門と農業の接点をなす契約農業は、工業化の進展が農業に波及するところに形成されてきた。戦後世界の北側諸国において、工業化を主軸とする経済発展は、食糧需要の増大と多様化をもたらし、農業生産の川上・川下には、化学工業技術の応用によって投入資材製造業や食品加工・流通業が拡大・発展した。これらアグリビジネスないしアグロインダストリーとよばれる農業関連諸産業にとっては、種々の自然的条件に起因する農業生産や農産物市場の不安定性・不確実性を削減すること——具体的には、消費者需要に応じた原料品質の統一、それらの一定量で継続的、また適切なタイミングでの供給——が中心課題となる。これらを解決する手段として、農業生産を中心に関連する諸段階間で、意思決定やリスク配分上の調整（垂直的調整:vertical coordination）が様々な形で行われるようになった。契約農業はその一形態として先進工業国においてまず成立・拡大したのである。こうした意味で契約農業は、工業と農業の関係や食をめぐる都市と農村の関係（農産物が輸出の多くを占める南の諸国と北の工業諸国との関係も含む）を考える切り口の一つとして捉えることができる。

サハラ以南アフリカの多くの国では、農業が基幹産業であるにもかかわらず、農村人口の多くにとって、商品作物の投入資財や市場などにアクセスするのは容易なことではない。こうした状況に置いて、契約業者は契約農民に対し、契約作物生産に必要な技術指導や信用、投入財などをパッケージとして供与するケースが多い。植民地支配末期から今日に至るまで、世界銀行や国際開発諸機関そして当該国政府は、契約農業のこの市場統合効果に着目し、農村開発の制度的手段としてその導入を推進してきた。それらアフリカにおける契約農業に関する研究には、事業ごとの制度評価に力点を置き、あくまで先述の市場統合効果を積極的に捉える研究と、アグリビジネス資本による契約を通じた小農民支配という論点で、これを批判する研究が多くみられる。確かにどちらも、既存契約農業の実態の支配的な一面ではある。しかし、事業の性格や農民と契約業者

との関係は、業者（資本）の性格や生産者組織の有無などによって異なり、また変化していくのであり、それらの多面的検討を通じて可能性を探る必要がある。ここで、アフリカではないが、日本とフィリピン間のバナナ貿易における、契約栽培を通じたある試みを一例として挙げたい。

日本-フィリピン間のバナナ貿易の大部分が、大規模プランテーションでの多投型大量生産・大量流通を特徴とし、多国籍アグリビジネスの統合下で展開される一方で、ごく小規模ながら、ネグロス島に住む貧困層小農民と契約し、自然循環型農法で生産された無農薬バナナを草の根レベルで交易する、という活動がある。

(株)オルター・トレード・ジャパン社 (Alter Trade Japan: ATJ) は、生協連合グリーンコープ、生活クラブ生協、首都圏コープ事業連など生協グループと、日本ネグロス・キャンペーン委員会をはじめとする市民組織や個人の出資によって1989年に設立された、消費者ないし市民資本による株式会社である。ネグロス島の契約農家が生産した無農薬バナナには、バナナ農家の自立基金(1998年3月現在で12円)が上乘せられて、首都圏のいくつかの生協で販売されている。そのため値段は100グラムあたり50円前後と、他の大資本系列下で販売されるバナナに比して倍ほど高いが、ここからあがる収益のうち基金の分は、生産者奨励金としてバナナ生産者協会をつうじ各農家におりていく。こうした自立基金は農業用の資金として積み立てられ、生産者はバナナ事業の基盤のうえに、家畜を購入したり、生姜やトマトやタマネギなど農業生産を多様化することが可能になった。

ネグロス島は長年、フィリピンの主要輸出産品である砂糖の主産地として知られてきた。島の可耕地面積の67%をしめるサトウキビ農園は、その7割が人口の僅か3%の人に所有されており、そこで島人口の75%が農場労働者として働く、という植民地時代そのままのピラミッド型の構造が依然として残っていた。そうした状況の下で国際的な価格大暴落に見舞われ、多くの地主がさとうキビ生産を控えたとき、そこではたらいてきた人々は、土地も職もない状態に陥ることになったのである。ATJの前身である日本ネグロス・キャンペーン委員会の支援活動はこのときに始まった。しかし今日のATJによるネグロス島住民の自立支援とは、あくまでも既存のバナナ貿易における私たち消費者のかかわり方を変えていくという試みを通じてのものである。代表取締役である堀田正彦氏によれば、それは一方的な援助や不買運動といった消費者エゴに陥りがちな活動であってはならない。したがってこのATJが扱うバナナの消費をますます拡大していこう、という発想はない。この活動は、世界経済における不平等な富の分配構造(ネグロスの経済構造はいわばその縮図である)を変えていけるような方向性を提示する、一つのモデルにすぎない、と堀田氏はいう。しかしそこには、こうした生産者と消費者の対一の関係をつうじた活動が、地域を限らず多様な作物について拡がることへの期待が読みとられる。

(1)生協母体の消費者資本と生産者組織との間の直接取引であること、(2)したがって取引における意思決定には両者(とりわけ後者)の主体的な参加があること、そして(3)より公正な利益配分、またそれを実現するための土台として消費者側の意識の変化があること——ATJによるバナナ交易は、これらの3点を支柱とする契約栽培にもとづき、小規模ながらも確実に展開している。同様の活動が容易に拡大するなどとは思えない。しかし少なくとも、その小さな試みには読みとるべき示唆があるはずである。

## A Prospect of Contract Farming

OKURA Miwa  
Ritsumeikan University

The contract farming in developed countries is being established as the extension of industrialization spreads to an agricultural sector. It is important for modern agribusiness and agroindustries to diminish the insecurity of agricultural production, which is due to natural conditions. While in the most of sub-saharan countries in Africa, agricultural materials and markets are not easy to access for the most of farmers. In many cases, the enterprises provide farmers with packages of necessary materials and technologies for their production. Since the end of colonial era, international organizations such as World Bank and the governments of African countries have promoted the introduction of contract farming because of its effect on market unification. Recently, a case study of the small scale contract banana farming by peasant farmers in the Negros Island, Philippines was reported. The farmers make contracts with the corporation invested by the citizens, several cooperatives, and other NGOs in Japan. They produce unsprayed bananas by sustainable method. A part of the profit is paid to farmers as a subsidy so that they can increase their cropping items. This case suggests the importance of fair trade between the consumers in developed countries and the farmers in developing countries.

## 第 134 回学振セミナー

日 時：1998 年 12 月 19 日午後 2 時 - 4 時

話 題：「ケニアの家族計画と男性参加—キシイ県の調査から」

話し手：松園万亀雄氏（東京都立大学人文学部）

使用言語：日本語・英語 参加人数：53 名

要 旨：

ケニアではこれまで、家族計画運動は女性だけを対象におこなわれてきたが、最近ようやく男性への啓蒙活動の必要性が認識されてきた。演者は 1996 年にキシイ県の医療機関と農村において、家族計画に関する調査をおこなった。その結果、とくに避妊の意志決定への男性のかかわりや、各種の避妊法に対する認識およびその普及度などについて、以下のような知見が得られた。

①グシイ社会では現在、以前よりはるかに多くの男性が家族計画にふかい関心をよせている。一部の夫たちは、妻が避妊の相談や手術のために病院やクリニックに行くのに同行する。もっとも、そうした夫たちの大半は近代的な避妊法を自分のからだに用いることには消極的である。

②医者たちの熱意にもかかわらず、今の段階では、精管切除はほとんど効果をあげていない。グシイ男性の精管切除に対する否定的な、あるいは軽蔑的な態度は、日常生活のすみずみで現れている男女区別、男らしさの観念、大家族志向、などといったグシイの文化価値に由来するものである。そうした態度に容易に変化が生じるとは思われない。

③コンドームを避妊のために使用する夫の数がふえている。しかし彼らは、現在無料で配布されているコンドームの質には満足していない。質が悪いこと、さらには事前に使用法を知らなかったために、初回の使用がうまくいかず、その後コンドームを嫌悪するか無関心になった男性の

数は多い。

④男性にとってコンドームはほとんど唯一の主要な避妊法である以上、上質のコンドームを導入し、住民への配布・購買の便宜をはかるべきである。コンドームを求めて病院、クリニックを訪ねる男性の多くは、一部の医療関係者が考えているように家庭の外でコンドームを使用するつもりはなく、避妊のために妻に対して使用している。

ナイロビでもキシイ県でも、家族計画の推進に実際に携わっている専門家は一般にコンドームを軽視する傾向がある。無料配布のコンドームの大半は、家庭外で売春婦やガールフレンドや一時的な性交相手に対して使用されていると考えている専門家も少なくないが、それは根拠のない作り話である。病院、診療所、保健所で、あるいは家族計画普及員によって、コンドーム使用と使用後の処理についてのカウンセリングをもっと丁寧にするべきだ。その場合、看護師、普及員など、カウンセリングに直接携わる人々は、個々の男性クライアントについて、その家族構成、家屋の間取り、家具、水、照明器具について事前によく知っておかなければならない。

⑤家族計画について住民を啓蒙するためには、関係者は事前に社会独自の男女関係、世代関係、親族関係などを理解し、住民自身が好ましいとみなす情報伝達の回路をこそ活用すべきである。

### The 134th JSPS Seminar

Date: 19 December 1998

Time: 2:00 - 4:00 p.m.

Topic: Male involvement in family planning: A case study from Kisii District.

Presenter: Prof. MATSUZONO Makio, Social anthropologist, Tokyo Metropolitan University

Language: Japanese and English No. of participants: 53

#### Summary:

Recently, the importance of male involvement in family planning has been well recognized in Kenya. In 1996, the presenter conducted a preliminary survey on family planning among the Gusii people in Kisii District of western Kenya. He presented and discussed about the results which were acquired from the survey as follows:

1. In Gusii society, males are interested in family planning more than before. Some of husbands accompany their wives in visiting hospitals and clinics for family planning services, although the majority do not actively practice any modern method of contraception themselves.

2. It is doubtful that vasectomy would produce a measure of effect as a male contraceptive method in Gusii society in spite of the medical specialists' agenda. Most Gusii men show negative and even antagonistic attitudes towards vasectomy. This is deeply rooted in cultural values concerning manhood, procreative ability, and the idea of a large family. It seems difficult for Gusii men to change the attitudes.

3. Condom use is a spreading contraceptive method for men, but two major obstacles hamper more widespread use: the poor quality of commonly available condoms and the lack of encouragement and counselling for condom use to male clients in medical facilities.

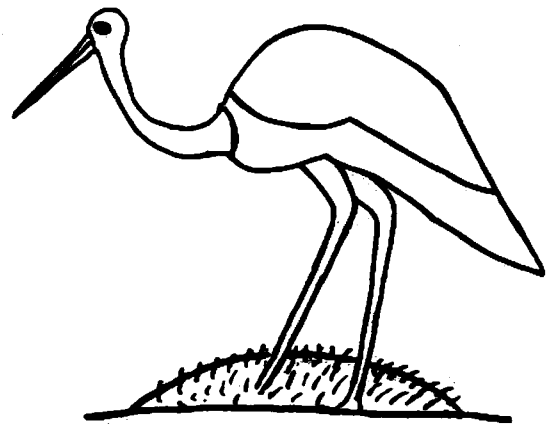
4. Family planning professionals generally seem to think lightly of condom use because some assume that free condoms are in large part used out of wedlock with prostitutes, girl friends, and other casual partners. Counseling on condom use had better be given in hospitals, clinics, dispensaries to as many prospective clients, by nurses and Community Based Distribution agents with adequate information of the

living conditions of each client.

5. To educate the people in family planning, medical and extension staff should understand the relationship between sexes, generations, and relatives within an individual society in advance, and utilize the communication channel that the people consider agreeable.

### 編集後記

♪今号の巻頭言を書いた村さんのように、最近、NGO やボランティア活動などで長期アフリカ滞在の前歴があるわかい研究者が少なくありません。かれらに共通するのは、すでに充分アフリカに魅了されながら、フィールド・ワークというものに対する気負いがあまりみられないことです。かれらはむしろ、研究のためのフィールドとしてアフリカをえらんだのではなく、アフリカで生活するために、研究という仕事をえらんだふしがあります。そんなかれらが、その情熱と日常感覚によって、学問の世界で大きな成果をあげることを期待しています。(太)



本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡ください。本誌のなかで署名のある記事については、それぞれの主張・意見は執筆者個人のもです。

For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The opinions expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors, neither of the editors nor JSPS.

ふくたな (日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース) 第8号 1999年1月31日発行

編集・発行者/足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

Hukutana (The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi) No. 8, January, 1999.

Edited by ADATI Tarô. © 1999 by JSPS Research Station, Nairobi. All rights reserved. Published by JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya. Tel: +254-2-442424 Fax: +254-2-442112 E-mail: jsps@swiftkenya.com

Printed by Mukaggis Printers, P. O. Box 979, Kerugoya, Kenya.

Japan Society for the Promotion of Science  
Research Station, Nairobi  
P. O. Box 14958, Nairobi, KENYA

VIA AIR MAIL  
PAR AVION